
とあるGANTZからの転送者

音夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるGANTZからの転送者

【コード】

N8516Z

【作者名】

音夢

【あらすじ】

注意、この作品は『GANTZに選ばれた男の娘』のバロディーとして書いています。

神田 かんだ 茜 あかねはある事件をきっかけに死亡して、GANTZに選ばれた。

そんなGANTZで約1年間戦い続けてある星人により殺された。

そして目覚めたら『とある』の世界に転送されて、茜の世界ががりと変わっていく。

プロローグ（前書き）

音夢の第2作品目となりました。
いっぱい見て下さい。

あと、文章が固過ぎるかもしれないので、レビュー承下さい。

プロローグ

「っ!!」
そんな声を出しながら、僕は強靱な剣戟により、体を剃る様に吹き飛ばされる。

「ぐはっ」
吹き飛ばされた先に有った車にぶつかり、車のボンネットはへこみ、フロントガラスは僕に突き刺さる様に割れる。すると僕の体には痛みと言っような衝動が駆け抜ける。

僕は車に乗る様になっている体を直ぐに起こすと、持っていたガンツソードを構える。

そして大きく息を吸い、荒れた呼吸を直しながら目を閉じる。

頭の中には憎しみや怒りと言った物が、僕を支配するかの様に込み上げる。それは妙に心地良く、僕のリミッターを外していく。

すると体は軽くなり、その支配に身を任せ、溺れながらを開き、こっつ呟いた。

「破壊する」

僕の心は『破壊』と言っ言葉に包まれていき、自分を壊していく。

するとそいつのオーラが僕を食らい、潰すかの様にに強大になる。

だが僕はオーラに飲み込まれながらも構えた刀をそいつ目掛けて、突く!

足はしつかりと踏み締められ、腕にはそいつを捉えた感覚と確かな手応えがあった。

だが次の瞬間、僕の心臓はそいつにより突き抜かれた。

体には痛みと言う、概念をを通り越して、『無』つまり麻痺が僕の体を覆う。

そして

「えっ」

僕の中には疑問だけが浮上する。

なんで？なんで！ちゃんとやったのにすると段々と意識が消えていく。

体は倒れていき、胸からは血潮が吹き出され、目には僕を突き刺した刀を持っている爺いが立っている。

「青いのー」

爺いはそんな事を僕に言い放ち、その言葉が僕の頭に響き渡り、僕は完全に地面に倒れ込む。

そして体は動かなくなり、爺いが気持ち悪い笑みを浮かべながら消えていく。

爺いは完全に僕の前から消える。

すると僕の頭に走馬灯が走り抜ける。

嫌だ！

僕は死にたくない

まだ、たくさんやりたい事だってあったし

それにこんな死にかたは嫌だよ

僕は走馬灯に縋りながらも、ゆつくりと目が閉じていく。完全に目を閉じると僕の瞳から涙が零れた。

涙は僕の頬を通りながら、僕は完全に死亡した。

死亡した体は重く、そして痛みが走っている。目を開け様としても開かず、暗闇だけが僕の目に入り込んでいる。

暗闇の中で僕はただ一人で孤独を味わっていた。そんな僕にはもう考える気力すらなく、ただひたすらに暗闇の中にいた。

「もう死にたい」

そんな僕の本音が響き渡り、僕を押し潰して来る。涙は枯れ果て、悲しいすら無意味だった。

もう嫌だ！

僕は暗闇の中で何かを殴る様に腕を横に降る。腕には何かが当たるはずもなく、僕は空振りをした様に暗闇の中に倒れ込む。

そんな体を起き上がらせる様に足に力を入れる。大切な人を守れもしないゆつくりと立ち上がり、僕は本音を暗闇に解き放ち。

なに一つ守れないなら、僕はこんな自分を恨む。喉には力が入り、声を振り絞り。

僕はこんな、こんな自分を、殺す！！
叫ぶ

声は暗闇に響き渡り、僕の体を溶かす様な光が僕に降り注ぐ。

すると枯れ果てたはずの涙が、目から零れ落ちた。

そして僕は光を求める様に手を伸ばす。

伸ばした手は燃える様な痛みが走りながら、光に飲み込まれる。様に転送され、消えていく。

体は全て消え去り、もう力すら入らなかった。

顔だけが残り

そして最後の力を振り絞って

「誰か助けてよ」

そう叫び、僕はなにかを握った。

その時には僕はもう光に飲み込まれて消えた。

僕は助けを求めて、消えていった体に力を入れる。すると体には力が入り、僕はゆっくりと目を開く。

目には眩しい程の光が入り込み、僕は反射的に目を瞑る。

そして目が慣れた所でもう一度目を開く。

そして入って来た光景は教会だった。

しかも教会の中で一番偉い人が祈りを捧げる、魔方陣が書かれた所に僕はいた。

手には本を握り、茶色のショートヘアだった髪はロングヘアに
なっている。

そして着ていたはずの服は着ておらず、代わりに黒い修道服を着て
いた。

僕は理解が出来ず「何処？」そんな言葉しか出なかった。

プロローグ（後書き）

感想をいっぱい下さい。

主人公設定

主人公設定

神田 茜 かんだ あかね

身長142cm 体重40kg

性別、ギリギリ男。まあ男何だけどね。

特技・好き

格闘技 『GANNTZのミッション中に鍛えられた我流の』

料理 『一人暮らしによって毎日の様に食事を作っていた。その為か料理本をよく見ている、小技だけならProLevel』

大切な人 『友達や自分を見てくれる人』

嫌い・苦手

友達を作る 『沢山いたがGANNTZによって奪われいき、失う事を極端に恐れている』

人ごみ 『人が周りにいると集中出来なかったり、よく男女とわずにナンパをされるから』

容姿

GANNTZで表すなら、玄野計が2で岸本恵が8。

『とある』なら御坂美琴が7で一方通行3でわった感じ。
美男子と言う寄りには、可愛い、美しいが似合う美少女。

目はキレる、もしくは敵を殺る時には鋭く、そして狩人の目の様に

冷血になるが、普通時は優しい感じの目。

髪は転送前はミディアムショートなのだが、転送さるた事によって長く美しい茶色のロングヘアになった。

声は女でも通用する高さの声と言うよりは、女では低くて男でも分かるかな？と言った感じの声。

性格は自分の事よりも周りを重視する様な良い人なのだが、自分ではただの偽善者、大切なを助けられなかった償いと言った思いが心の中にある。

僕は理解出来なくなっていた
手には見知らぬ本を握り、しかもショートだった茶色の髪がロング
になっている。

しかも刀で突き刺された心臓はな治り、血の付いた服は黒く、そし
て妙に重い修道服に変わっている始末だ。

そして口から出た言葉は「何処？」だった。

目に入って来る光景は木の椅子が並び、僕の後ろには大きなステ
ンドグラスがある。

ステンドグラスから光は反射されていない。

それには綺麗と言った言葉はなく、そんなステンドグラスはただの
ガラスだ。

そして多分、教会だろうがやはり『何故』となってしまう。

僕は記憶を思い出していく。

GANTZのミッション中に死んだはずなのに。

僕はゆっくりとだが、記憶された光景、声、人物を思い出していっ
た。

すると頭の中に自分自身を殺したいと思った記憶、そして、そんな
自分を助けて欲しいと思った二つの記憶が流れて来る。

「大切な人は守れずに、何で僕は生きてるだよ」

そんな言葉を自分自身に、そして大切だった、人達を思い浮かべな
がら僕は呟く。

すると体の中に怒りと憎しみ、愛おしさが溢れ出す。

怒りは僕の心を支配し、憎しみは体を支配する、そして愛おしさは僕の衝動を呼び起こしていく。

「ぐっつう、はぁー、ハアハア」

僕は右手を額に当て、肩で息をしながら、何とか怒りと憎しみを抑える。

「ハアハア僕には死ぬ覚悟すらない、の、か」

僕は自分自身を憎み、死にたいと思ったが死ぬ覚悟すら存在しない。

「なら」

体を起き上がらせ、唇を噛み締めながら。

「弱い僕には生きるしかない。あの人達の為にも、弱さを捨てる」
僕はそう呟いた。

例えどんな事が会っても、死なないと。
生きるだけしか出来ないなら。

僕は一旦、気を落ち着かせて状況を把握する為に、持っていた本をもう一度見る。

本の表紙には何も書いてなく、

1000ページと超えているだろうかと言っぐらい厚い。

そしてそのページ数に見合った重さが手に掛かる。

「見てみるか」

僕はそのページ数に悠つを抱きながらも本を開く。

そこにはインクで書かれた様な文字があり。

『自分を憎み、自分を殺したいと思った黒い玉の使者よ、力を欲しろ』

こう書かれていた。

僕がその文字を見た瞬間に何かが変わる。

「っ」

痛みが僕の頭に走り抜け、体の血に何かが生まれた。

血管から血は身体中を巡り、僕は本を離す。

だが離れた本は空中を浮き、頭に直接的にページが入り込んでくる。

その莫大なページのデータは、頭に覚えていく事は出来ずに、ただ理解と言っただけがされた。

すると細胞が理解された答え、そして身体中を駆け巡る血に反応する様に何かがおこる。

それは僕の背中に焼ける様な痛みが駆け抜ける。

それと同時に、明らかに僕が存在が変わった。

それは強さとも言え、定義とも言えるだろうか。

「何これ、ハアハア」

僕は肩で息をしながら、理解された答えを頭に思い浮かべた。

その途端、頭に痛みが駆け抜ける。

痛みにより、頭は何も考えられなくなる。

すると本は青い炎を生みながら燃え上がり消えていく。

「なんだったの？」

僕は手を額に当てながら、そう呟いた。

すると目の前にある大きな扉がゆっくりと開く。扉は木が伸縮し、そして扉を繋ぐ金具からは扉の体重をなんとか支える様な危なっかしい軋みが響く。

扉が完全に開き、扉を開けた二人の人が見えた。僕は直ぐに修道服のローブを羽織り、顔を隠す。

一人は男で、赤髪のロン毛をしている。

身長は200を超えているだろうが顔には縦線のバーコードがあり、そして僕と同じ黒い修道服を着ている。

もう一人は女で、片方だけが太ももまで無くなっているジーンズに、白いTシャツ、そして腰まで滑らかに伸びたポニーテール。そして腰には長い刀がある。

そいつらが僕に近づき歩いてくる。歩く度に音を立て、そして目が会った瞬間に、場の空気が変わる。

空気は痛い程に僕に突き刺さる。

「君が『黒い玉』の使者かな？」

修道服の男が僕を挑発するかの様に言ってくる。

「知らないよ」

「嘘は辞めた方が良いでしょう」

ポニーテールの女が冷血に僕に言い放つ。

「嘘なんて言ってますよ！」

「それは僕達が決める事だよ」

するて男はタバコに火を付け、吸い出す。

「なにしてるの？」

「これをするためさ」

男はタバコを僕に向かって落とす様に投げる。

「なっ！」

すると僕からしたら、あり得なくはない光景がおこる。

タバコに付いた火がまるで、その場に広がる様に燃え上がり、僕に近づいてくる。

これだけならば、全くと言っていい程に僕は見てきたが、それを人がやっていると言う事が不思議だった。

「っ」

すると僕はローブに当たり、ローブを燃やしながら消えていった。

「ローブ燃えちゃった」

僕の顔は完全にあいつらに見られた。

「君、女だったのか」

「違うよ」

そして僕は長い髪を靡かせる様に右足を後ろに引く。

「まあ、どうでもいいけどね」

男は手に炎を集めながら。

「巨人に苦痛の贈り物」

放たれた

男は手に炎を集めながら

「巨人に苦痛の贈り物―」
放たれた。

「やっぱり、あり得ないよね」

放たれた炎とは、約5mぐらいが離れているが熱く、大気中にある水分を枯れ果てるぐらいまで気温を上げる。

すると炎から火花が散らされる

火花は周りにある椅子や床に着火しそうになりながら、段々と大きくなり僕に近づいてくる。

僕は反射的に足に力を入れ、炎に接近する。炎に近づくと体には焼ける様な熱が突き刺さる。

暑い

そして炎との距離が1mを切った時、僕は炎に飛び込み様に回避し、男の視界から完全に消える。

「残念だったね。まあ、これながら何回やっても」おそいですよ

「えっ！」

僕は修道服のズボンを膝ぐらいまで落とし、一瞬で男の真横に来ていた。

男は直ぐに僕から距離を取りながら、もう一度炎を手に集める。

すると背中に味わった灼熱の痛みが、また現れる。

そして僕はこんな言葉を無意識に呟く。

「力を解き放て」

そう呟いた瞬間に僕を覆う様に、螺旋を描きながら青い炎が現れた。

「ふふ認め様、君が黒い玉の使者だと言う事を。だが一旦君には痛い目にあってもらう」

男がそう言つと、男の感じが変わる。

すると男から空気？なのかな？、解らないが渦を巻く様に何かがある。

そして男はそんな事に見向きもせず、呟き始める。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

男を囲む様に炎が生まれる。

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり」

そして男を囲った炎が、男の周りを回り始める。

「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり」

炎は巨体に

「その名は炎、その役は剣」

炎は熱く、呻き

「頭I現せよ、我が身を喰らいて力と為せ」

その瞬間、炎は男の後ろで牛になる。

「魔女狩りの王、イノケンティウス」

そのイノケンティウスと呼ばれた炎は僕を食らうように襲って来る。

「ステイル、やり過ぎでは」

すると女が刀を掴みながら、止めに入ってきて来る。

「関係ないさ」

だが男は止めずに、僕にイノケンティウスを向けて来る。

「暑い」

僕は螺旋を描いている炎をコントロールしながら、炎の純度を上げ、炎を槍の様に鋭くする。

そしてイノケンティウルの肩目掛けて、炎を飛ばし、貫く

イノケンティウスの肩は消滅するが、直ぐに復活する。

「そんな事しても無駄だよ。炎と炎がぶつかり合うだけさ」

男は僕を蔑む様に言ってくる。

「へー、なら」

僕は感覚を研ぎ澄ませながら炎を操り、炎を消す。

「なんのつもりだい」

「関係ないでしょ」

すると男は軽くイラついたのか

「そうだね」と言い、そのままイノケンティウスを僕に襲い掛からせる。

「熱がダメなら」

僕は手をイノケンティウスに向ける。

すると手には鉄をも溶かす熱が伝わってくる。

「アブソリュートゼロの炎を」
僕は手に渦を巻く様に、炎を集る。そして炎を刀の様にして、手で握る。

すると手から身体中に、炎の温度が駆け抜ける。
それは冷たさと言うなの、炎の熱だろうか。

そして足に力を入れ、イノケンティウスに飛び込む様に接近する。

1 m付近まで接近すると、僕は炎の刃をイノケンティウスの首目掛けて、斬りつける。
手には物体を斬った感覚はなく、空振りした感じだ。

「なに！」
男はあり得ないと言うよりは、あるはずが無かった光景を見たかのような声を出す。

それは多分、コレのせいだろう
イノケンティウスは首から、身体中を蝕む様に凍結していく。

結構、使えたな
僕はある程度 of 感覚を覚えながら、また炎の純度を上げていく
すると炎は大気中との温度差により、音を立てる。

「くっそ、なら」
男はもう一度、炎を集め様とすると、女が黒いポニーテールを揺らしながら僕に近づいて来る。

「流石にやめた方がいいですよ」
女は軽く怒っているのか、冷血過ぎる声で男に言い放つ。

「しょうがない」

男はそれを察したのか、炎を消しさる。

「すみません、私の仲間入りが迷惑を掛けました」
女が急に謝罪をしてきた。

「えっ？なに！」

僕は状況を理解出来なくなった。さっきまでは男を殺る、で理解出来ていたが、今の女の謝罪で理解不明になった。

「だから、悪かったと言ってるんだ」

男までもが僕に謝罪してきた。

「えっと」

すると僕はいつきに緊張感から解き放たれた。それと連鎖するかの様に、炎が僕の手から消えていく。

炎が全部消えると、足に身体中の体重が掛かり、意識が遠のきながら倒れていく。

そして僕は倒れながら女の胸に倒れ込んだ。

「キャッ」

女は可愛らしい悲鳴を上げる。

が、少なくとも僕を退かさないうって事は、嫌がってはいない様だ

「すみません」

「いいですよ。ゆっくりと寝て下さい」

女は僕を包み込む様な笑顔で、僕の頭を撫でてくれた。

そして僕は女の言葉に身を任せて、眠りに着く。

僕の目の前には僕と言う名の化け物がいる。

それは翼を生やし、腰に掛けて長い髪と、手に持っているブレード、そして着ている修道服には大量の血が着いている。

そんなやつと僕は、この白い空間にいた。周りには何も無く、ただ白く、壁の無い空気が続いていた。

すると、そいつが僕に喋り掛けてくる。

「てめえは何がしたいんだ」

「何って？」

僕はそのいつの疑問を抱き聞き返す。

「ふっ、簡単さあ。てめえはGANTZに出会って大切な人が出来た。だが、大切な人を失った、てめえは最早それを忘れて、新たな力を手にして自分を欲しいと、自分が愛しいと言った。そんな、てめえは何なんだよ」

そいつの言葉は痛みを思わす程に、深く、鋭く僕に突き刺さり、僕の心を抉り、切り裂く。

「違う！僕は忘れてなんか」

僕は叫び、そいつを睨みながら叫んだ。

だがそいつは

「違うないさ」

その言葉で片付けた。

「五月蠅い！！僕は、僕は」

僕は叫びながら、強く拳を握り締める。手には爪が突き刺さり血が出る。だが痛みを感じる暇さえなく怒りが込み上げる。

「責められただけでキレルなよ」

また僕を、僕を

感情は収集がつかなくなり、怒りは限界地点を、超えた。そして思わず声が出た。

「何が分かるんだよ」

「はっ？」

そいつは意味不明なのか飽きた様に言った。

「何が分かるんだよ！！」

僕は感情、理性のままに叫び。喉には痛い程の力が掛かり、叫んだ。

「まさにヒステリックだな。そんなクズに代わって僕がてめえを殺してやるよ」

するとそいつは、持っているブレードを高く上げる。ブレードからは血が、そいつの手に向かって、ブレードの刃を津たりながら移動していく。そしてブレードを振り下ろした。ブレードからは血が飛び散り、白い床を血で染め上げた。

「じゃあな、クズ」

そいつはブレードを腕の一部の様に扱い、僕に接近してくる。僕は足首と太ももを伸ばす様に、力を入れ、大きな回避行動を取ろうとした時には、ブレードは僕の左胸を突き刺している。

「えっ」

左胸からは血潮が吹き出て、身体中を麻痺させていく。そして麻痺

すら感じさせない程の痛みが走る。

「な、ん、で」

そいつはブレードを僕の左胸から抜き、僕を見下す様に「また会うのかな。クズ君」と言い放った。

するとそいつは腰から、体全体を抉る様に僕の前から消えていく。僕はそいつが消えるのを見ながら、ゆっくりと後ろに倒れていく。

そして、そいつが完全に消え去り、僕は白い床に倒れていく。だが床に着く事はなく、遠泳に倒れ、落ち続ける。

手を頭の上に翳しながら、僕は痛みを感じ、多量の出血をしながら「ぐああああああああ」と叫んだ。喉には痛い程の力が掛かり、そして声は枯れ果てる。

すると僕を救う様に光が差し伸べられる。僕はその光に縋る様に、翳した手で掴もうとするが、光は掴めずに落ちていく。

その途端に、僕の目が覚めた。僕は左胸を抑える様にして、体をおこす。すると体の節々が軋み、痛みを発する。僕は慣れた様にその痛みを無視して、周りを見る。

そこは何処かの医務室だろうか。そして僕の膝には白いシートが羽尾られている。そしてシートの上には、黒く、そして僕を魅了する様に長く美しくポニーテールをしている女がいる。

えっと、さっきいた女の人だよな

僕は軽く悩みながら考え始める。

なんで、いっや、とりあえず起こさないと

そして手を女の体に乗せて、ゆっくりと揺すり始める。「あー、起きて下さい。あー」何回かやってみるが、全く起きずに寧ろ悪化したかな？。

女は僕に近づきながら、首に手を回す様に掛けて、ぶら下がる。すると首には体重が掛かるが、女性だからか、そんなに重く無く寧ろ軽いくらいだ。

「あー、起きて下さい」

さっきよりも強く僕は女の体を揺らす。すると「んんう、んん」と変な声を上げながら、ゆっくりと目を開らく。

「ふえっ」

女は僕を見て、可愛らしい声を上げる。そんな感じを見ると、守って欲しいけど、護りたい感じが出て来る。

「あの、そろそろ離してくれませんか？」

流石に女性がこんなに近くにいると、そのー、気恥ずかしい。

「あっ？あっ！、そのすみません」

女は漸く目を完全と言うか、僕にぶら下がってるのに驚いたのか、頬を赤くして、僕から飛び跳ねる様に離れる。すると女の髪は中を美しく舞う様に広がり、そして女の元へと戻っていく。

女は僕から離れると床に立ち、顔を下に向けながら、モジモジと両手を重ねて、指と指を回している。その光景は凄く可愛く、僕を癒してくる。

「あの、その「眠かったんですね」

「えっ」

僕は女がいい終わる前に、僕の言葉を言った。そして女の驚く様な声は、僕の心にゆっくりと染み渡って来る。

「だって、コレ貴方がやってくれたんでしょ」

僕は羽織っているシーツを取り、ベッドの隅に置くと女に見せる様に、体を回す。

僕の体には着ていた修道服は無く、代わりに白と黒を足らったミニスカート。上には胸元を露出したブラウスをきている。そして腕には2〜3本の包帯が巻かれている。しかも包帯は少なくとも2回は取り替えられた様な感じだ。

「あっ、はい」

女は覚束無い感じに答えてくれた。やっぱりね

「こんな事やってたら、誰でも眠くなっちゃうよ」そう僕は微笑みながら言った。すると女は落ち着く様に胸を下ろす。

「もう起きたんだね」

その声が耳に入ってくる。その瞬間、僕は足を回す様に体を声がした方向に向け、そして軽く拳を握り、構える。

そして体を回すと声の主が視界に入る。声の主はあの赤髪の男だった。

「ずいぶんと物騒だね」

1-4 (前書き)

今日の投稿は終わりです。

「ずいぶんと物騒だね」

僕の視界には赤髪の男が入っている。顔には縦線のバーコードがあり、修道服を着ている。

「貴方が言えた口ですか」

ゆっくりと口を開け、過去を思い出し、冷静に返した。

「ふっ、それもそうだね」

男は僕の事実過ぎる、事実を認めた。まあ、それが正しいよね。

すると男はベットに座る。ベットには体重が掛かったのか、軋み様に音を立てる。

「じゃっ」

そう言つと、男は修道服のポケットからタバコの箱を出した。そして箱からタバコを一本出すと、火を付け、口に運ぶ。

「「なっ」

僕と女は同時にビクリしたかの様な声を出す。そして僕達の体は固まった。それはあり得ない光景を見たと言つか、男の常識を疑うと言つか。

そうして20秒くらいが経ち、「ぶっはー」男は口を開け、タバコの煙を出す。煙は中に浮かびながら、溶け込む様に消えていく。

「ここ医務室ですよね」

僕は固まった体を動かして、疑問を持ちながら言った。すると男は

当たり前のように「そうだね」と言った。

「僕は貴方の常識力を疑います」

「ってダメです」

女は腰に有った刀を抜き、タバコの先端を切り落とした。タバコの先端は落下しながら、空気中の酸素を含み、燃え上がる。そしてタバコは空気中でチリとなった。

「なにするだ、神製」

男は女の事を『神製』と呼びながら、もう一度タバコの箱に手を掛ける。

すると僕は反射的に炎を出して、タバコの箱ごと燃やした。箱からは鼻を刺激する様な匂いを一瞬だけ発するが、その匂いは消える。そしてタバコの箱はその場から燃え消えた。

「君も何をするんだ！しかも箱ごとって」

「医務室で吸う方が悪いんですよ」

僕の言葉に男は何も言えなくなつて、無理くり話を転換させようとしてくる。

「そう言えば君の名前はなんだい」

「無理に変えたいのは分かりますけど、名を聞くなら自分から名乗るべきですよ」

すると女は腕を伸ばす様に、刀を男の首筋に向ける。刀からは周りの光を反射して光っている。そうすると女は「そうですよ」「そう言い放った。言葉からは飽きた様に感じられる。

「神製、分かったから刀を引いてくれ」

すると女は刀を男の首筋から、伸ばした腕を肘から折るように引き、腰にしまう。

「では、どうぞ」

「ああ」

男は軽く頷きながら、喋り始める。「僕の名はステイル マグヌスだよ」

すると女も喋り始める。

「私の名前は神製 火織です。気軽に読んで下さい」と可愛いらしく自己紹介をしてくれた。

「僕は神田 茜です」

僕は簡単な自己紹介だが、この中には100%の笑顔を入れている。その途端に二人の頬が赤くなる。

「えーと、それで。君の事を聞きたいんだが、いいかな」

ステイルさんが僕に聞いてくるが、僕の頭の中には先ず聞いておかないと、いけない事が有った。それは「ステイルさん、何で僕に襲って来たのか答えて下さい」

すると二人が苦笑いを浮かべながら、重そうに口を開く。

「いやー、その、ね、あれは」

ステイルさんの目はゆっくりと動き、目が合わなくなる。

「ステイルがかってに神田さんを試すと言って、やったんです」神製さんが一瞬でステイルさんの逃げ道を潰した。するとステイルさんは「あははは」と気まずそうに笑う。

「まあ、それは置いていて」
置いていい物じゃないと思うよ、ステイルさん。

「僕の事は呼び捨てで構わないよ。茜」

「わかりました。ステイル。なら神製さんも僕なんかには、畏まらなくていいですよ」

「わかりました。宜しく願います。茜」

と神製さんが僕を魅力する様に、綺麗で、今にも壊れるそうなくらいに繊細な笑顔を浮かべながら頷く。

「ですが私が敬語でないのなら、茜も私の事をもっと楽にお呼び下さい」

うーん、何がいいかな？

軽く悩みながら、一つだけ疑問が浮かぶ。それは、まだ敬語だよな。

「じゃあ、火織お姉ちゃんはどうですか？」

僕はなんとなく、からかってみた。

すると神製さんの頬が真っ赤になりながら、動きがゆっくりになっていく。

「かかか、火織お姉ちゃんですか」

「嫌ですよね、やっぱり」

僕はある程度の予想が出来ていた為、予想通りの答えを返す。

すると神製さんは唾を飲んだのか、喉の上から少しだけ喉仏が見える。そして神製さんはゆっくりと口を開け、「うれしいです。やっと、やっと姉になれます」と予想より右斜め上をいかれた。

「ほんとにいいの？」

「はい」

そうして僕は火織お姉ちゃんの胸に飛び込んだ。理由はもう一度、守るべき人が出来て嬉しかったからだ。すると火織お姉ちゃんが力いっぱい抱き締めてくれた。

その途端、僕の頭に何かが過る。それは僕に何かを訴える様に。

「で、僕達への質問はもうないかい？」

「えっ？あ！はい」

ステイルの声に僕は驚きながら、そう返事をすると、ステイルが医務室の外に出て、台車を押してくる。台車は少しだけ音を建て、僕の目の前に止まる。

黒く巨大な玉を乗せた台車が

「この黒い玉の事、知ってるかい？知ってるなら茜、君との関係を教えてくれ」

1-4 (後書き)

感想を下さい。

1-5 (前書き)

感想をお願いします。

「この黒い玉の事、知ってるかい？知ってるなら茜、君との関係を教えてくれ」ステイルの声は僕に入らずに、通り抜けていく。

僕の目の前にあったのはGANTZだ。それは似た何かと言う考えも出るだろうが、違わない。これは紛れもないGANTZだ。その場を威圧し、そして僕の体を震わす。

「知ってるようだね」

「知らない」

ダメだ。この二人にはGANTZの事は教えられない。知ったら、GANTZに溺れてしまう。

「茜、私に教えてください」

火織お姉ちゃんはあからさまに嘘を言ってる僕を、怒るわけではなく、ただ優しく聞いてくる。

「ほんとに知らないよ」

GANTZの威圧に潰されそうになりながらも、笑顔を作りながら、その異様な物体に触れる。

「っ」

僕の頭に痛みが走る。それは、まるでGANTZと僕が繋がった様に痛みが放たれた。僕は額と頭を抑えて痛みを耐えた。

それと同時にGANTZのトランクが一斉に開いた。トランクの中

には、何も無かった。
そんな、あり得ない

GANTZを動かす為に必要な男や、ミッション中に使う武器すらも無かった。それはつまり、GANTZではない？のか。でもこの感じはGANTZだよな。

僕の頭には多数の理論が浮かび上がるが、結論には達していない。
するとゆつくりと浮かび上がる様に、GANTZに言葉が表示される。

『こいつらをやっちゃてください。ちなみにルールはないです』
そんな言葉が表示されるとトランクが閉まり、また新しい言葉が表示され様とするが、文字は消えていく。

「なんなんだい？コレは」
ステイルが痺れを切らしたのか聞いて来るが僕は無視した。いや、声が僕の耳に入らなかった。

「GANTZ、答えてくれ。ルールがないって、どう言う事なんだ」
するとGANTZに正しい文字を隠す様に、無数の文字が表示されていく。そしてある一定の場所に正しい文字が表示される。
「100てんを取ったからだす」

「はっ？」
僕の口からはそんな、間抜けな声が出た。記憶を思い出してみるが、全く記憶にはない。

その途端、GANTZは転送されていく。転送された切り口は青く、そしてゲームなんかでよく見る、データの塊の様だ。

僕は手をGANTZから離す。するとGANTZは完成に転送された。GANTZが載っていた台車にはへこみすらない。これは台車が凄いのか、それともGANTZの仕様なのか今になっては分からない。

すると頭の痛みは消え、体にはリバウンドの様に緊張感なら解き放たれ、ゆっくりとベットに座り込む。ベットは軽く軋みながらも直ぐに終わる。

「茜、知ってるいる事を話して来れ」

「うん、わかった」

僕はゆっくりと口を開け、喋り始める。

「1年くらい前だったかな」

そうして僕は一拍空けて、また喋り出す。今度は真剣に

「1年前、僕は学校の帰りに友達と話しながら歩いてたんだ。そこでちよつとした事があって、その友達が車に跳ねられそうになっただよな。それで僕、友達を助ける為に走って、友達を突き飛ばして、友達を車の前から退けたんだよね。そしたら案の定、車に跳ねられて、目が覚めたらあの『黒い玉』が目の前にあった。したら、急に星人と戦えって言われて、僕、死に物狂いで星人達を殺したんだ」

すると僕の目から涙が零れる。だが僕は涙に気づかないで喋り続けた。

「そのうち、星人を殺すのが楽しくなってきた、何だが自分が自分じゃ無くなって、そしたら、そこで出来た大切な人が目の前で死んでいって、僕もう死にたかった、えっ？」

その瞬間、僕は誰かに抱き締められた。強く、優しく、そして包み込むように。

「茜は、茜は悪くありません。茜はもう、こんなにも泣いて、その人達への償いは済んだはずです」

火織お姉ちゃんの言葉は、僕の凍結した心にゆっくりと染み渡り、そして凍結した心を溶かしていく。

「でも、僕は明里さんを助けられなくて僕は思い出すのさえ辛かった。」

「なら、今度は私が守ります。私の命は貴方に委ねます。そして茜の命を私に委ねて下さい」

火織お姉ちゃんは更に強く、優しく僕を抱き締めてくれた。

「はい」

僕の心の氷は完成に溶け、心から返事が出来た。

「嬉しいです」

火織お姉ちゃんの顔は僕を魅力し、そして虜にする様な笑顔になる。

「もういいかな？」

ステイルのそんな言葉で僕達は慌てて離れた。そして離れた火織お姉ちゃんの頬を見てみると、頬は赤くなっている。

多分、僕も赤いんだろうな

「じゃあ、聞きたい事は終わったけど、ここからが本題だ」

ステイルの目は更に怖くなり、顔が真剣になる。

「僕達はある人を助けたいんだ。それを手伝ってくれ」

ステイルは頭を下げながら、まるで大切な物を守るかの様な声で言う。つてくる。

「私からもお願いします」

火織お姉ちゃんも続いて、頭を下げる。

「分からないけど、僕に出来る事があるなら、僕はやりますよ」

「ありがとう」

火織お姉ちゃんが僕に抱きついてきた。体には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わる。

「あれ？火織お姉ちゃん、喋り方変わった？」

「茜にはもつと私を見てもらいたいから、そんなにきつい敬語は無しにしたいです、から」

火織お姉ちゃんは僕に断れたくないのか、声を震わせながら言うてくる。

僕の答えは

「嬉しい」

僕がそう言った瞬間に、更に強く抱き締めてくる。

「そつだ、ステイル」

「なんだい？茜」

ステイルは僕の声に不思議そうに返してきた。

僕がステイルに聞きたい事は

「あの炎ってなんなの？」

1-6 (前書き)

感想待っています。

「あの炎ってなんなの？」

僕がそう言った瞬間に二人が呆れ顔なのか、それともただビックリしたのか、ステイルは少し口を開け、僕に抱きついている火織お姉ちゃんは固まっている。

「どうしたの？二人共」

すると二人が思い出したかの様に喋り出す。

「いや、その」

火織お姉ちゃんはまるで気を使ってるみたいに、口をこもらせながら、そう言う。

「あれは魔術だよ」

ステイルのあり得ない言葉に、僕は呆然と固まった。

あり得ないよね。だって魔術って、あつ、でもGANTZもあつたし
そうして僕は無理くりにも、自分に理解させた。例えば分からない
事があっても。

「理解しようとしてるけど、理解しきれないようだね」

ステイルが心配なのか、上から目線で言ってきた。

「理解出来た方が凄いでしょ」

僕はステイルの言葉に理論的ではなく、客観的に返した。

「だって魔術って、例え存在しても僕からしたらあり得ないし」

するとステイルが軽く悩みながら、ある事が閃いた様で喋り出す。

「見た方が早いだろうし、あそこに行こうか」

「あそこですか」

ステイルと火織お姉ちゃんのそんな言葉に僕の頭には？が浮かぶ。すると火織お姉ちゃんが僕から離れて、床に立ち上がり、僕に手を差し出してきた。

「行きましようか」

その言葉が耳に入ってきた瞬間に、僕はゆっくりと手を伸ばし、火織お姉ちゃんの手を握る。その途端、僕の心はトクンと揺れる。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わってくる。それは優しく心を温めてくれた。それは嬉しく、僕の中に広がっていく。

「うん」

と僕はその嬉しさのまま立ち上がり、廊下へと出た。廊下は10mぐらいのストロークが続いている。そしてそんなストロークの中には20個ほどの窓が付いている。

「こつちだよ」

ステイルの声に従い、僕は火織お姉ちゃんと手を繋ぎながら歩く。すると廊下には僕達の足音が響き渡っていく。

20個も付いている窓からは多分、季節は夏とギリギリ言える、7月下旬ごろの陽光が照り刺している。だが、そんな暑そうな陽光とは裏腹に廊下には冷たい空気が漂っている。

「そう言えば火織お姉ちゃん」

すると頭にある事が浮かぶ。

「なんですか？」

それは

「何で僕、女装してるの？」

「イヤでしたか？」

火織お姉ちゃんが僕の事を心配してるのか、少し声を小さくしながら言う。

「イヤじゃないけど、その、恥ずかしいから」

僕はそんな火織お姉ちゃんを見てると、心苦しくなっていく。

「茜は可愛いから大丈夫です」

火織お姉ちゃんは胸を張りながら、嬉しそうに言う。が、恥ずかしいのに変わりはない。でも火織お姉ちゃんが嬉しそうになるのを、見るのは僕も嬉しかった。

「分かったよ。火織お姉ちゃん」

と僕は笑顔になりながら、そんな言葉を言って、この話を終わらせた。

そうして歩いていくと、ある部屋の前で止まった。部屋の扉は木を使い、取っ手と留め具には鉄が使われている。

「ここだよ」

するとステイルは扉をゆっくりと開けると、留め具は軋みながら音を立てる。そうしてステイルが部屋に入っていく。

「入りますよ」

火織お姉ちゃんが僕を先導する様に先に入り、僕の手を引いてくれた。それは僕を安心させる様に優しかった。

「うん」

そうして僕は部屋に入った。
壁にはレンガが使われている。そして絶対にレンガが余って、作っ
たのだろう普通のより小さな暖炉がある。そして木で作られた机
が1つと椅子が4人分あった。

「じゃあ、茜」

ステイルが椅子に座りながら話し掛けてくる。

「炎を出してくれ」

「分かった」

すると僕は火織お姉ちゃんから手を放して、体の力を抜いていった。

炎を出した時の感覚を。反射的ではなく、心から

その途端に僕の中にあつた力がうめいていく。それはゆっくりと僕
を蝕み、炎を生み出した。

炎を腕に渦巻く様に纏わせる。

「ステイル、これでいい」

「あ、ああ、君は素晴らしいよ。たった2〜3回でここまで魔力を
操るとは」

ステイルは本当に驚いたような様子だが、僕からしたら普通だった。
GANZの最初だってそうだ、生きてくうえで掴んだ感覚は体に
覚えていかないといけなかった。

だがステイルの発言に僕は一つだけ引つかかった。

「ステイル、魔力を操るって、まだ魔術は使えてないの」

「それについては「私が教えましょう」

スタイルが話してる途中で火織お姉ちゃんが喋り出す。

「私は基本的には使いません。そのため、この刀とワイヤーで戦闘をします」

火織お姉ちゃんは腰にある刀を抜き、僕に見せる様に前に出してくれた。

「魔術を行うにはルーンが必要とされますが、茜はルーンを使わずに炎を出していくので、多分、魔力だけで出している力技だと思いますが」

火織お姉ちゃんがそう言い終わるとスタイルが紙を出してきた。紙には20cmぐらいの魔方陣が書かれている。

「これがルーンを組み合わせた魔方陣なんだけど、魔方陣に魔力を通してくれ」

そう言うときスタイルは魔方陣が書かれた紙を机の上に乗せた。

「炎の出し方は分かるけど、魔力の操り方は分からないよ」

僕は事実を述べると、火織お姉ちゃんとスタイルが苦笑いをする。

「先ずはやってみて下さい」

火織お姉ちゃんの超えに後押しされながら、僕は紙に触れた瞬間に、魔方陣がひかる

「なにこれ」

僕は紙に触れた瞬間に、魔方陣がひかる。

「なにこれ」

その途端、肩甲骨辺りに激痛が走る。すると肩甲骨から蝕む様に腕にも痛みが流れていく。

「っ」

「茜放すんだ！」

ステイルが多分そう叫んだ、だろうが僕の耳には入ってこなかった。すると僕は倒れる様に机に手を着く。机が少し揺れ、安定感を失っていく。

「茜！」

火織お姉ちゃんの声がゆっくりと僕に伝わってくる。それは優しく、そして強く、僕の痛みを消していく。

「火織お姉ちゃん」

僕はそう言いながら、ゆっくりと魔方陣から手を放す。その途端、魔方陣に無数の新たな線が浮かび、もう一つの魔方陣を作り出した。

「茜！」

そう火織お姉ちゃんの叫び声が聞こえたと共に僕は、火織お姉ちゃんが僕の手を引いてくれた。すると僕は火織お姉ちゃんの暖かさを感じながら、火織お姉ちゃんに向かって抱きつく様に倒れ、魔方陣から離れた。その途端、後ろからけたたましい音が耳に入っていく。

「こ、れは」

ステイルが一瞬、驚き言葉を失う様に、言葉を詰まらせた。

僕はすぐに魔方陣の方に首を動かした。そこには魔方陣から湧き上がる様に水が吹き出ている。そしてその水を新たに出来た魔方陣が凍結させていく。

「こんな事がおこるとは」

「これって、こう言う魔方陣じゃないの？」

僕は火織お姉ちゃんのあり得なさそうな声に疑問を抱いた。だって魔方陣は魔力を流して、その魔術を出す物だよな。

「いや、この魔方陣は使用者を浮かせる物だ。茜が作り出した魔方陣は別として、もともとあった魔方陣から水が出るこう言うなんてあり得ないんだ」

ステイルの言葉に僕は理解出来なかった。

「では茜は魔方陣を再構築したと、そんな事あり得ないですよ」

「分からない。だが、魔方陣を調べれば分かるだろうが、まず茜」ステイルは手で額を抑えながら、疲れた感じかの表情で僕に話し掛けてくる。

「炎を出してくれ」

そう本題を告げた。

「分かった」

そう言う僕に感覚を手の平に集中させていく。すると手に何かが集まっていく感じがする。その瞬間、手の細胞とリンクする。

その途端、手の平に炎が生まれた。炎は手の平で熱く、渦を巻く様にぶつかり合い、ボールになっていく。

「これでいいの？」

そう疑問系で僕が聞くとステイルは「ああ」と淡白に答えた。するとステイルが僕に向かって、疲れた様に喋り出す。

「そのまま雷を出せるか？いや、そんなあり得ない事を聞いて、わ、悪いな」

ステイルが口を詰まらせた理由は多分これだろう。僕はステイルが話してる途中で、『雷』を出せるか、と言われた集中に炎に雷を思い描いた。その瞬間、炎が雷へと変わった。雷は空中にあるゴミに反発し、手の平で音を立てていく。

「なにが悪いの？」

「いや、茜ならあり得るか」

ステイルはそう呟きながら、自分で処理したようだ。

「もう茜も疲れただろう。明日、インデックスを追って学園都市に行く」

その途端、僕は理解出来なくなった。

「インデックス？学園都市？つてなに」

すると二人は思い出したかの様に僕に説明し始める。

「インデックスって言うのは僕達が助ける人さ。そして学園都市って言うのは君と僕達が明日いく場所だよ」

ステイルの言葉に僕は困惑した。

「えっ、明日！？それって最初あった時に言った事に関わりあるね？」

僕は日本語になってない日本語で話した。多分、頭が回らなかったんだと思う。

「ああ、あながちあってるが、聞いていなかったが茜はいいのか」

「なにが？」

するとステイルが口をこもらせながら僕に「学園都市に行く事だよ」と告げた。

「火織お姉ちゃんがくるなら」

「私も行きますよ」

と火織お姉ちゃんが僕を虜にする様な笑顔で、答えてくれた。

「なら行く」

僕がそう笑顔で言うのと二人の頬が赤くなった。

「じゃあ、茜の了解もえた所で、茜は神製の部屋でも休んでいてくれ」

「うん」

そう言うって僕は立ち上がり、火織お姉ちゃんに手を差し出した。

「はい、捕まって」

だが火織お姉ちゃんは反応しない。と言うか耳に入っていないのかな？

「火織お姉ちゃん」

僕がそう言うのと火織お姉ちゃんが反応してくれた。

「あつ、ごめんなさい」

そう言うって僕の手を握って立ち上がる。火織お姉ちゃんの頬は赤く、そして僕の顔を見てくれない。

「火織お姉ちゃん、僕の事キライになったの？」

そう言うって僕の心に寂しさと、悲しさが生まれていく。

「そんな事ないですよ」
とちゃんと僕の顔を見て、笑顔で言ってくれた。

僕は最後に自分の思いを全て込めて「ほんと？」と言った。

「はい、茜は大切な弟ですよ」

と火織お姉ちゃんが笑顔で言いながら、その瞬間に抱きつかれた。

「うん」

僕は火織お姉ちゃんに逆らう事なく、受け入れていた。それは多分、嬉しかったんだと思う。

「では部屋にいきましょうか」

「分かったよ。火織お姉ちゃん」
と僕達は軽く話して廊下に出た。

117 (後書き)

原作に入らないよお。シクシク

118 (前書き)

原作に入らない。
あと感想を下さい。

僕達は軽く話して廊下に出た。

廊下には10mのストロークに、その10mの中に20個ほどの窓がある。そして窓からは先程とは違い、夏とは言えないような冷たい陽光が照らしだされ、僕の肌に突き刺さる。

気温は8 前後と言った所か

僕がそう思った瞬間、肌にピリピリとした何かが走り、僕の真をゆつくりと蝕む様に冷やしていく。

「茜は寒くないんですか？」

火織お姉ちゃんが心配そうな声で僕に喋り掛けてきた。火織お姉ちゃんのそんな声を聞くと、不安にさせたくないと言う気持ちが溢れてかた。

「大丈夫だよ、火織お姉ちゃん」

と僕は笑顔で言いつた。

「よかったです」

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向かって歩いていく。

廊下には僕達が歩く度に床が少し軋み、音を立てていく。音は廊下の恥まで響き渡るが、その音に反応する者は一切いない。

と言うか、廊下の10mはあるストロークには人が全くいない。

「火織お姉ちゃん」

「何ですか？茜」

火織お姉ちゃんは心配と言うか、不思議そうな顔を浮かべて僕に返

してくれた。

そうして僕は息を吸い「何で人がいないの？」と聞いてみた。

「多分、今日はみんな色々やる事があるんだと思いますよ」

火織お姉ちゃんは冷静に答えてくれた。

「そうなんだ」

「はい」

と和む様なテンポと喋り方で話してた。すると僕のお腹から地響きの様な音がる。その瞬間、普通なら顔だけだろうが、それを通り越して、さっきまで寒かった体が一瞬で熱くなっていく。

「こ、こ、こりえは」

僕は完全にパニックって呂律が回っていない。すると火織お姉ちゃんがクスと、可愛らしく微笑むと僕に抱きついてきた。火織お姉ちゃんの腕が軽く僕に食い込み、そして暖かさが伝わってくる。

「そう言えば、もうお昼でしたね」

火織お姉ちゃんがそう落ち着いた感じで言うと、僕はある事が気にかかった。

それは「火織お姉ちゃん、今更だけど僕って何時間ぐらい寝てたの？」

とほんとに今更の事だった。

「えーと、茜が此方に来たのが12時ごろ、つまり深夜0時で起きたのが11時ぐらいなので、だいたい10:30分くらいですよ」
火織お姉ちゃんによる簡単な説明で僕はある事が分かった。それは僕が死んだ時間と連動している、と言う事だ。

「ありがと火織お姉ちゃん」

僕はそう笑顔で言うと、火織お姉ちゃんが僕から離れていく。すると僕の心が何故か寂しく、悲しくなっていく。それは泣く様な悲しさではなく、ただ火織お姉ちゃんを、求めていただけなのかもしれない。

「はい、では時間も時間ですし食事でもしますか」

火織お姉ちゃんが僕に気を使ってそう言うてくるた。僕はそれに甘えて「うん」と言った。

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に行くのではなく、食事をする場所、多分、食堂と呼ぶであろう場所に向かって歩き出した。

「茜は何か好きな食とかはあるんですか？」

火織お姉ちゃんが興味津々にそう聞いてきた。

その瞬間、僕はすぐに

「火織お姉ちゃんが作ってくれたら何でもいいよ」と返した。

「ふえっ」

火織お姉ちゃんは顔を真っ赤にしながら、そんな可愛らしく声を上げる。その声は僕の心をくすぐっていく。なんか萌えー、なのかな？

「可愛いよ、火織お姉ちゃん」

僕はそう言いながら、火織お姉ちゃんの手を握った。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わり、僕の中に嬉しさを生んでいく。

「あ、あ、あ茜、そのえっ」と

火織お姉ちゃんの呂律は回っていない。と言うかタジってるのかな。

「どうしたの？火織お姉ちゃん」

「あ、あの、その」

火織お姉ちゃんは僕の声に必死で反応しようとしながら、両手の指を回しながら、モジモジと言う。そんな仕草はすごく可愛いくて、僕をくすぐっていく。

「イヤだった」

僕がその言葉を言った瞬間に、火織お姉ちゃんは「違います！」と叫んだ。声は廊下を響き渡り、反響をしていく。

「火織お姉ちゃん？」

「あつ、ごめんなさい」

と僕に気を使う様に火織お姉ちゃんは誤った。その途端、僕は火織お姉ちゃんを抱きしめた。何方かと言えば抱きついたが正しい表現だろうか。

「ごめんね。火織お姉ちゃん」

「えっ」

突然の謝罪に火織お姉ちゃんは、驚いた様な顔をしている。

「何で急に」

火織お姉ちゃんの問いに答える、為にゆっくりと息を吸い

「火織お姉ちゃんが好きだからだよ」

と言った。その途端、僕の心臓はトクンと大きく揺れ動いた。そうして僕はゆっくりと火織お姉ちゃんから離れた。

すると心臓はまた大きく揺れていく。だが、そんな事を僕は無視した。

そうして笑顔を作りながら

「火織お姉ちゃん」

「ひえ」

火織お姉ちゃんはそんな驚いた様な声をあげる。声は軽く裏返し、少し感高くなっている。

僕は声に気づかない振りをしながら、火織お姉ちゃんの手を掴み

「行く」

と言った。すると手には火織お姉ちゃんの暖かさが伝わり、ゆっくりと手に力を入れていく。そうして僕は火織お姉ちゃんと手を繋ぎながら、食堂に向かって歩き出した。

119 (前書き)

あと2011年も少しですね。

はあー、今年も早かった。と言うか中学校に入学した事以外なにもなかった。あー、あと練習のかいあってか、両声類になって女声が出る様になりました。

そして今はガキ使の『笑ってはいけない』見えます。

では本編をどうぞ

食堂に向かって歩き出した。

歩き出すこと5分。僕は火織お姉ちゃんの手を繋ぎながら、先導する様に歩いていたが、食堂の場所を知らない僕が先導なんて出来なかった。その為、途中から火織お姉ちゃんに先導をしてもらった。

そうして僕達は食堂の扉まで来た。やっぱりと言っていいだろうが、扉は木材で作られている。そして扉からは、ほんのりとい匂いが流れている。

「入りましょうか」

火織お姉ちゃんが美しく、可愛いらしい笑顔で僕に言って来た。

「うん」

と僕はそう言いながら、僕達は食堂に入った。

すると目には時代の良し悪しを感じる様な光景が入ってくる。食堂は先程の木材感とは売って違って、コンクリートかな？そんな感じの物を使って作られていた。それは建物が完全に変わっている感じだった。

その光景に僕は啞然とした。やっぱりあれかな。現代の社会構成かな。

「火織お姉ちゃん凄いな」

「何がですか？」

火織お姉ちゃんの顔には、僕が何を言っているのか分からない様な、不思議そうな顔をしている。

やっぱり、慣れちゃうと気にならないのかな？

「いや、その急に現代的になって」

火織お姉ちゃんはさっきの不思議そうな顔から、急に思い出したかのような表情を浮かべながら喋り出す。

「それですね。この食堂は昨年出来たばかりなので」

「納得したいけど、ビミョーに出来ない様な感じだね」

「そうですね」

火織お姉ちゃんとそんな簡単な話しをしたら、食を頼む為のおばちゃんがいるカウンターに向かって歩く。

歩いていると分かるのが、食堂は体育館並に大きい。そして、その大きな食堂の3分の2・5ぐらいが、ロングテーブルと椅子で埋めつくされている。

そうしてカウンターに着いた。

カウンターにはおばちゃんが一人と、2個のメニューがある。

すると火織お姉ちゃんがメニューを見ないで、食を頼み始める。

「私は蕎麦を、彼には」

「同じで」

火織お姉ちゃんを待たせない為に僕はそう答えた。もっと簡単な理由で言うと、メニューの文字を見て分かるのが英語だ。つまり中も全て英語だろう。絶対に読めるはずがない。

するとおばちゃんは分かった様で、蕎麦を受け取りにカウンターのの中に入っていく。

その途端、僕はある事に気づいた。それは

「あつ、そうだ火織お姉ちゃん」

「何ですか？」

「お金つてどうするの？」

そうお金だ。僕はここに来るまでにGANTZを行っていた。つまりお金を持っているはずなんかない。

「ふふ、大丈夫ですよ」

そう火織お姉ちゃんは軽く笑うと、微笑みながらそう優しく言った。

火織お姉ちゃんの優しさは僕に伝わってくるが、

「いや、普通ダメじゃん」

するとおばちゃんが蕎麦を乗せた2つのプレートを持って来た。

「はい蕎麦だよ」

おばちゃんがそう言くと、火織お姉ちゃんはプレートを握る。

「ありがとうございます」

「あいよ」

とおばちゃんは普通に流しているが、あり得ない。だって食事だよ。お金いるはずだよな。

「どうも」

僕は一人取り残されたくない為、流れに合わせてプレートを握る。すると手には蕎麦の熱が生ぬるく伝わってくる。

「行きましようか」

火織お姉ちゃんはそう言いと、ロングテーブルに向かって歩いてい

く。それに着いていく様に足を動かす。

「火織お姉ちゃん、コレってどういうこと？」

僕の中にはそんな言葉しか、浮かび上がらなかった。

「この食堂は無料なんですよ」

と火織お姉ちゃんは当たり前前の様に言う。が普通ならあり得ない。

まあ、慣れていこう。そう僕は深く心に刻んだ。

そうして僕達は返却カウンターに近い席に座った。そこからはゆっくりと首を回し、周りを見てみると全く人がいない。

すると火織お姉ちゃんが箸箱に指を入れる。すると5〜6回、陶器と陶器がぶつかり合う、甲高い音がする。そうして火織お姉ちゃんが箸を取って、僕に渡してくれた。

「ありがとう」

僕は箸を受け取る。すると火織お姉ちゃんの指と、僕の指がぶつかり合う。

「「あつ」」

僕と火織お姉ちゃんはそんな声を口から出した。その途端、火織お姉ちゃんの頬が赤くなっていく。

そんな火織お姉ちゃんの顔を見ると、僕の顔が熱くなっていく。多分、僕も赤いんだろうな。

そうして少しだけ沈黙が僕達の間を支配した。

僕はこの状況を打破すべく、口をゆっくりと開く。そうして

「食べよっか」

と勇気を振り絞って言った。普通ならこんな事に勇気なんていらないんだろうな。

「はい」
火織お姉ちゃんは恥ずかしそうな声で、そう返事をしてくれた。それは凄く可愛いだろぅが、僕は火織お姉ちゃんの顔をあまり見れなかった。

そうして、ゆつくりと一拍置き

「いただきます」

火織お姉ちゃんとハモリながらそう言った。

僕は箸で蕎麦を掴み、口に入れた。すると口の中には蕎麦の美味しさと、出汁と中に入っていた鳥肉、ネギの美味しさが広がっていく。
「美味しい」

僕の口からは無意識に、そんな言葉が出た。

この味で無料なんだ。

「美味しい様で何よりです」

火織お姉ちゃんもそんな事を言いながら、蕎麦を口に運び、食べた。

「火織お姉ちゃんって蕎麦好きなの？」

「そうですね。一樣蕎麦や和食関係は何でも好きですよ」

火織お姉ちゃんはそう返してくれた。

そうして僕達は軽く話しながら食事を終わらした。

「ごちそうさまでした」

火織お姉ちゃんと合掌をしながら、そう言った。

僕達は立ち上がる。するとある事に気づいた。それは最初よりも、数人だけ人が座っている。

そうしてプレートを握り、足を返却カウンターに向けて動かした。

返却カウンターは省スペースで作ってたかったのか、約1mぐらいの幅にプレートごと食器を入れる様になっている。

プレートを返却カウンターに僕達を入れる。

「では、私の部屋に行きましょうか」

「うん」

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向けて歩き出した。

1110 (前書き)

2012年になったけど、全然そんな感じがしない。むしろまだ2011年であって欲しいよ！

今、僕は火織お姉ちゃんと廊下を歩いている。廊下はあいかわらず長く、そして寒かった。

すると火織お姉ちゃんが優しく僕の手を握る。その途端、火織お姉ちゃんの暖かさが、ゆっくりと僕の手から腕に渡る様に伝わっていく。

その瞬間

「火織お姉ちゃん!?!」

と僕は甲高い、ビックリした様な声が出た。

すると体の真から、熱くなっていく。熱は身体中にゆっくりと回って、体の起動回路をショートさせていく。

「どうしました?」

火織お姉ちゃんは僕の行動を不思議に思ったのか、そんな事を僕に聞いてきた。

「いや、その」

すると火織お姉ちゃんは軽く首を傾げる。火織お姉ちゃんの長い黒髪は、流れる様に床に近づいていく。その姿は可愛い様で、美しくかった。

その途端、僕の頭には沈黙が走る。それは僕を支配する様に広がっていく。

「何でもない」

と僕は恥ずかしさを抑えながら、そう言った。

火織お姉ちゃんは首を元に戻すと、優しい笑顔を浮かべながら
「なら行きましょつか」
そう言った。

そうして僕達は火織お姉ちゃんの部屋に向かって歩き出した。

約8分ぐらいが経ち、部屋の前に着いた。
扉もやはり、木材で作られている。だがそれ以外に特に変わった様子もない、普通の扉だった。

「では、どうぞ」

火織お姉ちゃんが扉の取っ手を掴み、そして手首を回しながら取っ手を引き、扉を明けた。
すると扉に使われているであろう、留め具が軽く軋みながら、音を立てている。

そうして扉は完全に開き、僕達は部屋に入った。

そこには綺麗に片付けられた、部屋にタンス、ベットが1つがある。奥には扉があり、もう一つの部屋があるようだ。そんな光景が僕らの目に入ってきた。
光景的には殺風景だが、そんな光景も、火織お姉ちゃんらしい感じもしている。

「えー、いま座布団を用意します」
火織お姉ちゃんはそう言うと、奥にある扉を開け、部屋に入ろうとする。

「別に大丈夫だよ」
僕がそう言うが、火織お姉ちゃんの耳には入らなかった様で、その

まま部屋に入っっていった。

まっ、いっか

すると火織お姉ちゃんが座布団を二つ持って、部屋から出てきた。

「どうぞ」

火織お姉ちゃんはそう言いながら、座布団を床に置いた。

「ありがとうございます」

僕は火織お姉ちゃんの敬語と、部屋の感じに飲み込まれて、軽く緊張していた。

そうして僕は座布団に足を引くように座る。簡単に言えば正座だろう。

火織お姉ちゃんも僕に続く様に、座布団を僕の前に置き、正座をしながら座った。

すると僕達の間を沈黙が支配した。それは時間感覚さえも狂わせる程に凄まじかった。

「あ、茜」

火織お姉ちゃんが勇気を振り絞る様に、僕にそう話し掛けた。

「な、なに」

僕は火織お姉ちゃんの声に、驚きながら少し甲高い声でそう言った。

「あの、その」

その瞬間、僕の中にある事が浮かんだ。それは、このままだったら沈黙が続く。そうそれだった。

僕は何か色々な物を振り絞りながら、火織お姉ちゃんに

「火織お姉ちゃんの事、沢山教えて」
笑顔を作りながら、そう言った。

「はい」

火織お姉ちゃんが返事をしてくれた所で、火織お姉ちゃんは喋り続ける。

「そうですね、私の事と言っても、天草式でのトレーニングぐらいしか話せませんが、いいですか？」

「火織お姉ちゃんの事だったら、何でもいいよ」

僕がそう言っていると、火織お姉ちゃんは笑顔になりながら、話し出す。

「そうですね、今から3年くらい前に遡ります」

火織お姉ちゃんはゆっくりと自分の過去を話し始める。

「3年前、私は天草式で魔術や、武術のトレーニングに明け暮れていました」

そうして火織お姉ちゃんの話は、1時間ぐらい続いた。

そうして火織お姉ちゃんの話が終り、僕達は1500mトラックに来ていた。

服は火織お姉ちゃんから借りた、黒いジャージを着ている。

すると僕の体はある事を感じた。それは多分これだろう。

肌を感じる気温は、走りやすい涼しい風が僕に向かって吹き抜けていく。

そんな風とは裏腹に、体には夏下旬の様な、ビミョーな陽光が僕の肌突き刺さる。

そして足元のトラックには、一人分の場所を表す、ラインが引かれている。

何故、僕達がトラックに来たかと言うと、暇な時間があるなら走っていたい。と僕達が体育会系だと分かる様な、願望できていた。

僕はゆっくりと右足と左手を後ろに引き、体を前に倒す様に構える。

「では、走りましょうか」

「そうだね」

そうして僕達は走り出した。

体を倒す様にして、足は回す様に動かしていく。

「速いですね」

「そう」

そんな風に軽く喋りながら走っていく。

走る度に涼しい風が僕にぶつかり、走りやすくしていく。

そして走ってる内に、僕達がバカだと気づいた。

肌には先程とは明らかに違う、陽光が肌に突き刺さる。

足元にあるトラックには少しオレンジじみた光で、トラック全てを照らされている。

そう今はもうPM6:00だ。

僕達が走り出したのは多分、PM1時ぐらいだろう。それから5時間、僕は火織お姉ちゃんと話しながら走っていた。今になってから思う。何で気づかなかったんだろう。

「シャワーでも浴びますか」

「だね」

しかも息が全く上がっていないのも不思議だ。

そうして僕達はシャワーを浴びる為に、入浴場に向かって歩き出した。

1-1-1 (前書き)

何となく2話投稿。

僕は今、シャワーを浴びる為に、火織お姉ちゃんと廊下を歩いていた。廊下にある窓からは夕日の光が差し込み、廊下一面を淡いオレンジじみた色に染め上げている。

そして廊下は朝とは違って違い、そこまで寒くはない。まあ何方かと言うと、さっきまでのランニング、いや長距離走かな、どっちでもいいけど。取り合えず走ったせいかな？

そんな事を考えていると入浴場の前に着いた。入浴場には日本らしい暖簾が掛かっている。

ここ外国だよな。

今の僕からしたら、そんな事はどうでもよかった。僕の目にはそれ以上に大変な物が入っている。

それは暖簾にあった。

暖簾は赤く塗られ、真ん中には『女湯』と白い糸で刺繍されている。

「えーと、火織お姉ちゃん」

「何ですか」

僕達はゆっくりと息を吸い、そして喋り出す。

「何で『女湯』しかないの？」

「女湯しかないから、ないんです」

火織お姉ちゃんはそう堂々と宣言するが、普通なら男湯もあるよね。

「こっつて男湯ないの？」

「ありますよ」

火織お姉ちゃんはまたしても堂々と宣言するけど、じゃあ何でその途端、僕の中にある事が浮かぶ。

「じゃあ、なんで女湯なんか」

それは

「一緒に入りたいからです」
「やっぱり」

「あはははは」

僕の口からは、そんな笑い声しか出なかった。

「では入りますよ」

すると火織お姉ちゃんは僕の腕を掴む。腕には火織お姉ちゃんの力が入り、そのまま女湯に入ろうと引つ張る。

「キャーーーーー」

そして、そのまま僕は火織お姉ちゃんに引きづられながら、女湯に入った。その瞬間、僕の視界が消えた。消えたと言う表現よりは、真っ暗になったの方が正しいかな。

「なに？これ」

「流石に裸を見られるのは気が引けるので」

すると火織お姉ちゃんが服を脱ぎ始めたのか、火織お姉ちゃんが黙り、何かがこすれる音がする。

その瞬間、僕の体が燃える様に、熱くなっていく。頭の中には火織お姉ちゃんの。

僕の起動回路がオーバードした。多分、顔は凄く赤いだろな。

「私は脱ぎ終わったので、次は茜のを」

火織お姉ちゃんのそんな声がしたと思ったら、右腕が何かに掴まれ、
圧迫される。

「火織お姉ちゃん!」

僕はすぐに火織お姉ちゃんだと分かり、軽く叫ぶ様に、そんな声を
出した。

「どうしました?」

火織お姉ちゃんは自分が何をしているのか、分かっているのか、
そんな声を出した。

「どうしました、じゃないよ!火織お姉ちゃん何しようとしてるの」

「茜の服を脱がせ様としている、だけです」

火織お姉ちゃんはそう堂々と宣言するけど、普通はあり得ないよ。
やっぱり火織お姉ちゃんって、どっかズレてる。

「他の人が来たらどうするの?」

「大丈夫です。今日は私達の貸し切りですから」

仕組まれていた。僕の中で何かに負けた。

そのまま僕は抵抗する事なく、素直に火織お姉ちゃんに服を脱がし
てもらい、シャワーを浴び始める。

体にはシャワーから出された、お湯が掛かり、ゆっくりと僕の体を
温めていく。

「どうですか茜?」

「気持ちいい」

僕はシャワー室に響く様に聞こえてきた声に、思った事をそのまま答えた。

「では頭を洗いますね」

「うん」

僕の視界は相変わらず暗闇のままだが、会話は成り立った。

すると火織お姉ちゃんが僕の頭に触れた。火織お姉ちゃんの手にはシャンプーがあるのか、少しだけ冷たい。

「洗っていきますね」

火織お姉ちゃんの手がゆつくりと動き、髪を絡める様に洗っていく。すると優しく僕の頭を刺激し、僕は気持ち良くなっていく。

「どうですか？」

「気持ち良いよ」

そうして僕は火織お姉ちゃんに髪や体を洗ってもらい、30分ぐらいでシャワー室を出た。

脱衣所に入ると、僕の濡れた体は脱衣所の気温により、冷やされて冷たくなっていく。

「では私が着せます」

「お願いします」

すると火織お姉ちゃんは「はい」と優しく言いながら、僕に服を着

せてくれた。

そうして5分ぐらいが経ち、僕達は服を着終わった。

「では目の布を外しましね」

そう言いながら、火織お姉ちゃんが僕の視界を潰していた『布』を外そうとする。

布だったんだ。

「取りますよ」

「はい」

火織お姉ちゃんの声にそう返事をする、目に光が入ってきた。僕は反射的に目を閉じた。

「取りましたよ」

そう聞こえると僕はゆっくりと目を開ける。すると光が目突き刺さる様に差し込み、悠つ感を覚えさせる。

「どうですか？」

「目が痛い」

火織お姉ちゃんの声に僕は冷静に答えた。実際ビミョーにだけど痛かったし。

「大丈夫ですか」

「大丈夫だよ」

火織お姉ちゃんの心配そうな声に僕はそう答えた。すると火織お姉ちゃんはゆっくりと肩の荷が降りたかの様に、肩が降ろされた。

その瞬間、僕のお腹が地響きを立てる様になった。

「ふふ、では夕食時ですし食堂に向かいますか」

火織お姉ちゃんは優しく微笑みながらそう言ってくれた。

僕の体は冷やされたはずなのに、一瞬で真から熱くなった。それは体の動きを遅くする様に。

だけどそんな中で僕はある事に気づいた。

「火織お姉ちゃん1つだけ聞かせて」

「何ですか？」

火織お姉ちゃんは何も分からない様に聞き返してきた。

そんな火織お姉ちゃんに言う為に、僕は息を吸い

「何で僕の服が変わってるの？」

そう言った。

僕の服は火織お姉ちゃんと同じ、白いTシャツに左の太ももを露出したジーンズを履いている。髪も同様にポニーテールにされている。

「私がお揃いが良かったからです」

火織お姉ちゃんは堂々とそう答えた。

「火織お姉ちゃん凄く嬉しいんだけど、その、ちょっとこしょばゆいよ」

「それなら私も嬉しいです」

そうして僕達は食堂に向かって歩き出した。

1-12 (前書き)

感想を下さい。

僕は今、火織お姉ちゃんと食堂の前に来ていた。食堂の扉からは美味しそうな匂いがほのかに流れている。それは僕の食欲を刺激していく。

「茜入りましょうか」

「うん」

僕は火織お姉ちゃんの声にそう答えると取っ手を掴み、手首を回しながらゆっくりと押す様に力を入れ、扉を開いた。

すると僕の目には扉や、この木材で作られた建物とは売って違う、コンクリートの様な壁で作られた現代的な光景が入って来た。やはり慣れない光景だよ。

それに昼間とは違って、食堂の半分ぐらいが人で埋め尽くされている。

僕がそう思っていると火織お姉ちゃんが背中を押す。

「行きますよ」

「分かってるよ」

そうして僕達はカウンターに向かって歩き出した。

カウンターは幅1mぐらいで作られている。そんなカウンターの中にはおばちゃんが1人とメニューが2つある。メニューのタイトルは英語だ。これを見て僕は理解した。多分、中も全て英語だろう。

「うごんで」

火織お姉ちゃんがそう言うのと僕は続け様に「同じで」と言った。と言うかメニユー見れないし。

「あいよ」

おばちゃんはそう言うのと、カウンターの奥に入っていった。

「それにしても、今日は人がいないはずじゃないの？」

僕はふと思いついたかの様に、火織お姉ちゃんに問い掛けた。

「そのはずだったんですが」

火織お姉ちゃんは苦笑いをしながら、そう言った。

その瞬間「神製、茜」と沢山の人がいる中からそんな声がした。僕は声が聞こえた瞬間、反射的に戦闘体制を取るかの様に、右足を大きく回しながら、体を声の方に向けた。

戦闘のクセって抜けないものだろうな。

すると火織お姉ちゃんは、1テンポ遅れて声の方に体を回した。

「ステイル」

体を回した、火織お姉ちゃんはそんな声を出した。

そこにはステイルと、金髪のロングヘアーの女性がいた。女性は僕が着ていた修道服とは違い、薄っすらとしたピンクの修道服を着ている。

「空いてるよ」

ステイルは隣の席を指刺しながらそう言いつた。

「ありがとう」

ステイルに感謝を込めながら、僕は笑顔で言う。すると何故かステイルや火織お姉ちゃんの頬が赤くなる。あと僕の事を知らない金髪の女性までもが赤くなる。

僕の頭は意味不明になった。

すると後ろでおばちゃんが、うどんが出来たようで「出来たよ」と言ってくれた。

僕と火織お姉ちゃんはまたカウンターの方を向く。そこにはプレートの上に器に入った、うどんがある。僕はプレートを握り「どうも」と言いながら、ステイルの方に歩き出した。

ステイルが座っている場所は、昼間に僕達が座っていた、返却カウンターに一番違いところだ。

そうして僕達はステイルがいる机まで来た。火織お姉ちゃんはステイルの横にある、空いている席に座る。僕も続け様に空いていた、金髪の女性の横に座った。

「最初にこんばんは茜」

「こんばんはステイル」

と僕は挨拶をしてきたステイルに、そう笑顔で返した。

「こんばんはです。スチュアートさん」

火織お姉ちゃんは何か緊張しているのか、ビミョーに固い敬語を使う。

「こんばんは神製。それと」

「彼は神田 茜です」

気を使ってくれたのか、ステイルは僕の自己紹介をしてくれた。

「こんばんは茜」

女性は挨拶をしてくれたが、僕の口からは「えーと貴方は」と言う言葉しか出なかった。

「私はローラ スチュアートよ。気軽にローラお姉ちゃんって読んでね」

その途端、僕の頭はクリアになった。と言うか何も考えられなくなった。

「えっと、その」

「早く」

女性は僕を急かす様にそんな言葉を僕に言う。

心拍数が分かる程に上がっていき、大きく息を吸いながら、勇気を振り絞り、

「ローラお姉ちゃん」

と言った。

僕がそう言った瞬間にローラお姉ちゃん抱きついてきた。それと同じ時に足に痛みが走る。

「ちよっ！離れて下さい」

「敬語イヤ」

ローラお姉ちゃんは、悲しそうな目で僕を見つめながらそう言った。
反則だよ

「分かったよ。でも離して」

「ありがと、でもイヤ」

そう言いながらローラお姉ちゃんは更に強く僕に抱きつき、足の痛みは増加していく。

「火織お姉ちゃん辞めて」

「だったらスチュアートさんから離れて下さい」

「私は離れないわよ」

二人は完全に僕を蚊帳の外にしながら、口論を始める。

「茜は嫌がつてるじゃないですか」

「推測は辞めなさい。私はまだ茜の口から、そんな事を聞いていません」

二人の口論は段々と激しくなっていく。

「茜は優しいので、そんな事を言えないのです」

「そんな事ないですよね、茜」

「僕にフラれても」

僕は助けを求める為に目を流しながら、ステイルを見た。

するとステイルも同様に目を反らした。

「もついいから食べようよ」

「そうですね」

「ええ」

二人は僕の意見に納得してくるた様で食事を始める。
箸を握り、僕はうどんを食べ様とする。

「茜」

「なに？ローラお姉ちゃん」

顔をローラお姉ちゃんの方に向ける。そこには箸を握ったローラお姉ちゃんがいる。箸にはローラお姉ちゃんの食事であるう、焼き魚が掴まんである。

「あーん」

「ふえ」

驚きのあまり、僕の口からはそんな間抜けな声が出た。

「あーん」

「本気」

僕は聞き返してみた

「マジだよ。じゃあ、あーん」

ローラお姉ちゃんがそう言った瞬間、僕は覚った。なにを言ってもダメだな。

「あーん」

僕は諦めて素直に口を開いた。

「あーん」

ローラお姉ちゃんの箸はゆっくりと僕の口に入ってくる。口を閉じたと同時に、ローラお姉ちゃんは箸を口から抜いていく。

箸が完全に抜け、僕は焼き魚を噛む。すると魚本来の味と、塩の旨さが広がっていく。

僕は無意識だけど笑顔になってるだろう。

その途端、肌には痛い程の視線が刺さり、一瞬で僕の笑顔は失われた。

ゆっくりと首を動かし、視線の先を見ようとしたが怖すぎて直視出来なかった。

そんな怖すぎる中で僕達は食事を済ませた。

1-13 (前書き)

書いていると疲れ以上に何か頭が真っ白になっていく。
そしてアイデアばっかが溜まって書けない。

夕食を済ませた僕は外に来ていた。

太陽は落ち、空には闇が広がっている。光と言う物はなく、ただ一人僕は闇の中にいた。

「今日は色々な事がありすぎたよ」

僕はゆつくりと朝の事を思い返す。

「ここに来てステイルや火織お姉ちゃんと出会った。それにローラお姉ちゃんとも」

その瞬間、僕の中には何かが生まれた。それは強く、そして僕を殺す様に締め付けていく。

「夢のあいづが言ってる方が正しいのかな？」

手を空に上げ、自分を見つめる様に言った。だが答えは返ってくるはずもなく、体には怒りともよく似たなにかが蝕む。

「取り敢えず、生きてみるか」

僕は体を落ち着かせる様にそう言い、火織お姉ちゃんの部屋に向かって歩き出した。

その瞬間、背中にぶつかる様に風がおきる。風により髪は空中を舞い、僕は押し出される様に協会の中に入った。

そのまま気にする事なく、足を火織お姉ちゃんの部屋に向かって進めた。

廊下の電球には電気が流れ、オレンジ時見た光を放っている。

窓から光とは売って違う、冷たい闇が広がっている。

「温度差が激し過ぎるよ」

僕は肌で感じ取った事をそのまま口にし出した。事実、外では多少だが、肌にピリピリとした何かが刺さっていた。が廊下は暖房が入っているのか熱い。

と言つか夏。いや下旬だからな

僕は自分自身で勝手に納得すると、再度、火織お姉ちゃんの部屋に向かって歩き出した。

歩く度に靴は床と擦れる、ぶつかり合い音を立てていく。音は廊下全体を巨大な筒の様に響き渡っていく。

そうして歩いていき、10分ぐらいで火織お姉ちゃんの部屋の前に着いた。

部屋の扉は僕が目から見たら、やっぱり珍しいよ。木材で出来ているし。

僕は手首を揺らす様に扉をノックする。すると扉は甲高い音になる。

「火織お姉ちゃん入るね」

そう言いながら右手で扉の取っ手を握り、手首を回しながら扉を引き開く。扉の留め具は軋みながら、周りに響く様に音を立てる。

僕は気にしないで部屋に入り、右手で取っ手を握ったまま、右腕から手首に掛けて後ろに大きく揺らし、扉を閉めた。

部屋の中にはベッドに座った、火織お姉ちゃんがいる。

「火織お姉ちゃんただいま」

僕がそう言つと火織お姉ちゃんは笑顔で「お帰りなさい茜」と優しく言つてくれた。

「火織お姉ちゃん、いま何時」

「午後11時です」

火織お姉ちゃんの言葉に僕は啞然とした。理由は簡単だ。僕が外に出たのは10時、つまり1時間も僕は外にいたんだ。

「どうしましたか。茜？」

火織お姉ちゃんが心配してくれたのか、そんな言葉を僕に掛けてくれた。

「いや、ちよつとね。何か1時間も外にいたんだなつて」

「ええ」

火織お姉ちゃんはそう頷いてくれた。でも、少しはフォローしてよ。

その途端、扉が急に開いた。扉は僕を襲う様に向かってくる。

「うわっ！」

僕は前に倒れる様にして扉を交わす。

そして体制を何とか持ち直し、体を扉の方に向ける。

そこには、こんな光景が目に入ってきた。

火織お姉ちゃんが刀を出し、そして扉を開いたであろうステイルの首筋に添えている。

「ステイル、何をしたか分かりますか」

火織お姉ちゃんの声は怒りを帯びた様に震えている。

「分かった。分かったから」
ステイルがそう言うと、火織お姉ちゃんはゆっくりと刀をステイルの首筋から離れた。

「茜」

そんな声が聞こえると同時に、ステイルの後ろから金色の長く美しい髪を靡かせながら、誰かが方に抱きついてきた。

「えっ」

僕はそんな声を出しながら、立ち直したはずの体制がベッドに勢いよく倒れた。

ベッドは大きく揺れ、そして軋む様な音を立てる。

だが僕は音を聞く余裕すらなく、背中に痛み、いや、物理的に何かがぶつかった様な感覚が走る。

「っ誰？」

首を動かし、抱きついてきた合いてに姿勢を向ける。

そこには自分の2倍はあるう長い髪を後ろで結び、そして僕の腹部に笑顔で顔を擦り付けている、ローラお姉ちゃんがいる。

「何やってるの」

僕が冷静にそう聞くと、それが不満なのか頬を膨らませながら喋り出す。

「反応が薄いですぞ」

「ローラお姉ちゃんは言葉が可笑的いよ」

僕がそう返すとローラお姉ちゃんは立ち上がり、「可笑しく、そんなはずはありません」と何かビミョーにお姉ちゃんぶりながら言う。

「もうどうでもいいよ」

そう言いながら僕は足に力を入れながら、ゆっくりと立ち上がる。

「ステイル、何の様で来たんですか」

「ああ、茜の寝る場所についてだが」「私のベッド」

二人の声は見事にハモリながら、ステイルの言い終わる前にそう告げた。

「君達は何を考えてるんだ。茜は『男』だよ」

ステイルがそう言った瞬間に、ローラお姉ちゃんは床に手を着けながら倒れた。

「どうしたの？ローラお姉ちゃん」

僕がそう声を掛けたと同時に

「負けた」とローラお姉ちゃんは呟いた。

「えっ？」

驚きのあまり、そんな声が出た。

するとローラお姉ちゃんはまた呟き始める。

「こんな可愛いらしい茜が男で。しかも、私よりも可愛いのに」

ローラお姉ちゃんのその言葉は強く、そして鋭く僕の心に突き刺さる。

1-13-5 (前書き)

感想を下さい。

直径2mぐらいの一人用のベッド。そんな中に茜を挟む様に、火織、ローラが横たわっている。

茜の体は脱力され、完全に眠りに付いている。そんな無防備な茜を見て、火織とローラは楽しんでいた。

(可愛い)

二人はそんな事を考えていると、ゆっくりと腕を伸ばし、そして茜の頬に触れた。

すると茜の頬は二人の指に合わせてへこみ、指には不思議な感覚が伝わる。

(もっと強く、やってもいいよね)

二人はそんな事を考えながら、ある決勝を決めた。

そして指て頬を挟む様に摘む。

すると二人の指には柔らかい頬の感触が伝わる。

茜の頬は気持ち良く、二人は茜の頬に吞まれる様に、更に強く摘み、茜の頬を楽しむ。

その途端、二人の力が強すぎるのか、大きく、ゆっくりと吐息を出していく。

「うーうー」

茜の吐息は二人の耳に当たり、二人を気持ち良く刺激していく。そんな事を二人は1時間ぐらい楽しんでいた。

時刻が0時になろうとする頃、二人は未だに茜で遊んでいた。

するとローラが待つていたかの様に火織に向かって話し出す。

「神製。お話がありんすけどいいですか？」

正確な日本語ではないが、ローラの声からは冷静に、且つ何かを見据えてる様に深い何かがある。

「分かりました」

火織はローラの感情を察しながら、紳士な言葉で返したが、気持ち的には（日本語が可笑しいです）と関係ない所に向いていた。

「では」

「ええ」

ローラの声に火織はそう頷くと、二人は茜を起こさない様にしながらベッドから下りて、ゆっくりと扉を開き、廊下に出た。

廊下に全ての物を凍らせる程の静寂が走っている。

だが、二人はそんな静寂に気づく事すらなく外に向かって歩き出した。

二人の間に会話で言う文字はなく、ただ二人が歩く度になる足音だけが響き渡り、静寂の中に存在する。

そんな『無』と言う言葉が似合う場所を維持するかの様に、何も喋らないまま二人は歩いている。

10分も歩き続けていると玄関に着いた。

玄関とは言っても、教会ではほとんどの人が外履を履いたまま入るため、出入り口が正しいだろう。

それを示すかの様に下駄は一切ない。

そして二人はそのまま外に出た。
するとローラは何ともないだろうが、火織には強烈な寒さが襲う。
だが火織はそれを無視しながら、ローラに向かって喋り出す。

「それで、話つてなんですか？ スチュアートさん」
火織は冷静に近い、怖さを帯びた声でそう言った。

「まあ、そんな怖い表情をしないでいいですよ」

「どうでもいいので、早くお願いします」
火織は全く聞き耳を立てずにそう言った。

何故、火織がここまで早くしてもらいたい理由は簡単だ。

(早く茜に触りたい)

そう、単純過ぎるが火織は本当に急いでいた。

「まあ、いいであります」

ローラはそう言いながら、ゆっくりと大きな息を吸い、そして
「本題は『茜』の事」と告げた。

その声が火織の見て入った途端、唐突過ぎたのか、火織は頭の上
？を浮かべた。

だが答えは出るはずもなく、火織は喋り出す。

「茜の事とは、どういう意味ですか？」

「簡単でありますよ。神製、茜は私が預かります。勿論、明日の日
本、学園都市にもついていきます」

ローラのそんな声が火織にゆっくりと響き渡り

(茜を？いや、でも茜は私の弟)

と火織は動揺しですが、ある結論に辿り着いた。

それは

「良いですよね？」

「です」

火織は小さく、そして心を読み取る様に呟く。

だが、そんな小さな声はローラに届くはずもなく、

「えっ、何って言ってるんでありんすか」

ローラはそう聞き返した。

火織はテンパっている自分を落ち着かせる様に、大きく、ゆっくりと息を吸い

「嫌です。茜、茜は私の弟で、私の物です！」

そう叫ぶ様に言い切った。火織の声は大気を震わせる様に、あたり一体に響き渡る。

「分かりました。では、私は正々堂々と神製、貴方から茜を奪い取りましょう」

「ええ」

二人はそう誓い合いながら、茜が寝ている部屋に向かって歩き出す。

約10分後、二人は部屋に着いていた。

扉の鍵は掛けられ、完全な密室になっている。

二人はそんな情報に感謝する様にベッドに横たわり、そして茜の腕を抱きしめる。

茜の腕は二人の体に密着しながら、圧迫されている。

だが、茜は目覚める事なく、二人を受け入れていた。

「お休み茜」

二人の声がそう重なると、二人は茜の頬にキスをする。

すると二人の唇には柔らかい頬の感触が、優しく唇を包み込んでいく。

二人はそんな茜の頬を楽しむ様に、味わいながら眠りに着いていく。

1-14 (前書き)

中途半端なタイトルだったので二つ目を投稿します。

目の前には白い世界が広がっている。果てはなく、ただただ永遠と
言う物だ。

そして、そんな白い世界とは似合わない者が僕を見る。僕とは必然
的に目が合い、僕の体には震える様な寒気が走る。

僕はそんな寒気を感じながらも、僕と目が合った者を見る。

血が付き、真紅と言う、滲む様な美しいさを描き出しているワイシ
ヤツを着ている。そんな恐怖と言う名の真紅だが、多分だが最終は
真っ白だったであろう。

そんなワイシャツの肩甲骨辺りは布は吹き飛ばされた横に破れ、そ
して炎の翼がある。

翼は少しでも動く度に、大気を燃やす様に熱く、そして触れられな
い様な闇を帯びている。

手には真っ赤な、真紅の血を付けたブレードを持っている。ブレー
ドに付いた血は、ゆっくりと床に向かって流れていく。血の雫はそ
いつの足下に付こうとするが、付かない。いや、付かないと言う寄
りは、落ちていく。

「久しぶり、いや、20時間ぶりぐらいかな？」

そいつはそんな奇妙な光景を見ても、動揺すらせずにそんな事を言
った。

その声が僕の耳に入ってきた瞬間に、僕は足を回す様に後ろに下げ、

体を構える。

「そう、強張るなクス君」

僕は体に力を入れながら

「黙れよ僕、いや茜」

そう言った。僕と目が合ったのは夢の僕だ。

「ふっ、まっいつか。それにしてもこの魔術って言うのはいいものだ。自分の想像通りに動くし、それに殺しにはピッタリだ」

そいつの口から出た、そんな戯れ言に啞然とする。が直ぐに分かった。そいつは決して冗談を言ってるわけではない。ただ殺しに使えると思ったただけなんだと。

「じゃあ、殺し合いの始まりだな!!」

そう言いながら、そいつは持っているブレードを地面に擦り付ける様にしながら、僕に向かってくると、肩を襲う様にブレードを振り上げた。

僕は足元から身体中の力を脱力、そして感覚を研ぎ澄ませながら、炎を出した。

炎は螺旋を描く様に僕を囲み、そいつのブレードを僕から弾く。

ブレードが甲高い音を上げ、そいつは炎の翼を動かしながら、強烈な風をおこしながら、僕から離れていく。

「逃がすかよ」

螺旋を描いた炎をそいつに意識を向けながら、炎を操りながらそいつに向かって放つ。すると炎は大気中にある酸素を吸収し、爆発的な温度と炎になっていく。

「逃げねえよ」

そいつはそう言いながら、炎の翼を大きく僕に向かって動かす。周りには大量の火の粉が飛び散りながら、ブレードを僕の右腕に向かって振り放つ。

「そうかよ」

僕はそう言いながら、右手に氷の刃を作り、そいつのブレードを防いだ。

「ならば!!」

その途端、そいつは翼の炎をブレードに纏わせながら、僕に再度降り放った。

「パクってみるか」

僕は刃の表面に炎と雷を纏わせた。

「そんな事しても溶けるだけだ!」

「溶けなえよ」

刃に纏った炎はアブソリュートゼロ。つまり絶対零度の炎で溶ける事なんてない。そして雷がそんな刃に帯びて、大気中にある流出やゴミに反発していき、破壊力を増していく。

そんな刃を持ちながら僕は体を回す様にしながら、そいつのブレードに向かって防ぐようにしながら、力を入れ、吹き飛ばした。

ブレードには半分ぐらいにまでヒビが入り、あと一撃すらも放てない程になった。

だが、僕は反動を受けたのか、僕の集中と感覚が途切れたのか、刃は粉々になる様に消滅していく。

「ちっ」

僕の口からは思わず、そんな舌打ちが出た。

まあ、やっぱりね。キレてると人格の半分ぐらいなら変わる。よね

「ぶっ」

するとそいつは僕を見下すかの様に、そんな不適な笑みを浮かべた。そいつのそんな笑みが、僕を馬鹿にするかの様に苛立たせる。

「気持ち悪い」

僕はその苛ついた気持ちをぶつける様に、足に炎を作り出し、空中で爆発させる様に発火させながら、そいつに向かって移動する。

するとそいつはまた不適な笑みを浮かべるながら、

「GANTZのミツシヨンで死んで、こんな世界に媚びて、大切な人を作った、ためえ何かに負けるはずないだろが!!」

そう言いながら、そいつはヒビの入ったブレードを僕に向かって振り下ろした。

僕はブレードの事など目に入らず、ただ、そいつの言葉が僕に怒りを作り出した。

そしてブレードは空気を切り裂く様に、大気を震わせるながら唸りを上げながら、僕の肩を切り裂く様に近づいてくる。

そんなブレードに手を翳しながら、ゆっくりと息を吸い

「燃える」

そう唱えた。

するとブレードには炎が生まれ、そしてブレードは炎により溶けていく。

「ふっ、たかだかこんな炎で僕を殺れると思ったか」
そいつはそう言いながら、ブレードから手を放して、腕を僕の胸に突き刺さした。

「えっ？」

僕がそんな驚きの声を出している時には、もう胸からは大量の血が流れ、床のない永遠の空間に落ちていく。

身体中にはその血の量に見合った痛みが体を蝕み、そして意識を遠のかしていく。

盲ろうとしていく意識の中に「また、鍛えてこいよクズ君」とそいつのそんな声が響き渡る。

「くそーーーー！！！！！！」

そんな叫ぶ様な声を出すと、喉には声帯を潰す程に強烈な力が入り、喉に痛みが走りながら、僕の視界は暗くなっていった。

そんな暗い視界の中で目には光が入っていく。

それは目に痛みをやり、僕は目を覚めた。

「ハアハア夢、かハアハア」

僕は肩で息をするかの様に荒れ、腕に力を入れながら、体を起き上げらせ様とするが無理だった。

僕は腕に向かって、首を回す様に動かしながら見てみた。

そこには片腕ずつに火織お姉ちゃんとローラお姉ちゃんがいた。

二人があっただかいのか腕には熱が伝わっている。

「な、な、なななななななんぞ」
そして二人を見た瞬間に、僕の口からはそんな声が出た。

1-15 (前書き)

ストーリーが大変です。

「な、な、なななななな」

そして二人を見た瞬間に、僕の口からはそんな声が出た。

すると二人はゆっくりとベッドの中で、体を伸ばしながら起きていく。

「んんー」

二人はそんな声を出しながら、ゆっくりと目覚め、次の瞬間、二人は腕から離れて、僕の胸に抱きついてきた。

「ちよっ！」

二人の腕は体を圧迫する様に力が入っていき、体には二人の暖かい体温が伝わっているくる。

それと同時に恥ずかしさと、緊張が体を支配してら心臓がバクバクと大きく揺れて胸の辺りに痛みを走らせる。

と言つか、僕どんだけヤバイの

僕がそう思った時には体はもう固まっていた。いや、正確に言えば強張っているだけだから、少しは動くんだろう。

「あっ？ 茜おはよ」

ローラお姉ちゃんが完全に目覚めたのか、笑顔で挨拶してくれた。

僕はゆっくりとだが体を動かしながら、「おはようじゃないよ」と言った。だけど、直ぐに体が固まっちゃった。

「大丈夫でありんすか？茜」

ローラお姉ちゃんは心配してくれてるのか、僕から離れて、そんな声を掛けてくれた。

「うにゃ」

その瞬間、ローラお姉ちゃんが火織お姉ちゃんを踏んだのか、そんな可愛い声を出した。

「あつ！ごめでありんす」

ローラお姉ちゃんはそう誤りながら火織お姉ちゃんから離れた。

「大丈夫ですよ」

「よかった」

二人がそんな風に話しているためか、僕は蚊帳の外にいた。

と言っか、もう分からないよ。

「はあー」

無意識に大きく溜め息を吐いた。すると二人は僕から離れてくれた。二人が離れた瞬間に、体の緊張や恥ずかしさが消えていき、体が動く様になった。

「今更だけど、二人共おはよ」

「おはよ」

二人は僕を溶かす様な笑顔でそう言ってくれた。

そうして5分くらい、朝日から動いて疲れた体を休ませていく。

「何か話でもしますか」

火織お姉ちゃんが気を使つて、そんな事を言ってくれた。

「分かった」

「大丈夫だよ」

とローラお姉ちゃんと僕は火織お姉ちゃんの話に乗った。

「では最初は茜から」

火織お姉ちゃんがいきなり僕に降つて来た。僕は軽く考えながら、ある事を思い出した。

それは

「さつき何で二人共、僕の腕に抱きついていたの？」
と僕はふと思いついた事を聞いてみた。

すると火織お姉ちゃんは間が悪くなったかの様に黙り込んだ。
いっぽうローラお姉ちゃんは「一緒に寝て、茜で遊びたかったから
でありんす」と堂々に言った。

その声を聞いた瞬間に、僕は何だか気恥ずかしくなった。
でも、ローラお姉ちゃん。こんな事を堂々に言っちゃダメだからね。
僕はそう心の中で思った。

こんな風に話していると5分と言つのはあつという間に過ぎて言っ
た。

「では、服でも着替えましょうか」

火織お姉ちゃんはそう言いながら、部屋にあるダンスに手を掛けな
がらそう言った。

「火織お姉ちゃん」

気になった事があつた為、僕は火織お姉ちゃんを呼ぶ。

「何ですか茜？」

「いや、僕の服ってないし、それにあつたとしても、着替える場所って何処？」

と僕は思った事をそのまま口にすっていると、僕の中で違和感とら言うか、嫌な予感が出た。

「服は私のを貸して上げます。あと着替える場所ですが、もちろん此処ですよ」

やっぱりね。

僕は火織お姉ちゃんの発言をまるで、当たり前かのように受け入れた。と言つか、言つた所で僕は無理だと覺つていた。

すると火織お姉ちゃんとローラお姉ちゃんが僕の服に手を掛ける。

火織お姉ちゃんの手はジーンズのボタンを外していく。ローラお姉ちゃんはゆっくりと僕のTシャツを上げていく。

つて！

「キヤーーーーー！！！！！！」

僕は30秒ぐらい、そんな悲鳴の様に叫んでいた。

すると二人は息を荒くしながら、喋り出す。

「ハア茜可愛いでありんすよハアハア」

「ハアハア茜は男なのに、こんな括れがあるなんて、ハアハア反則ですよ」

火織お姉ちゃんが僕の腰に腕を回して、まるで腰周りを測るかの様にそんな事を言いながら、服を脱がしていく。

「だから、辞めっ！」
逆らう為に手に力を入れて、二人を離そうとするが、二人は全く動かない。

「だから」「ダメだよ」「」

二人の声で僕は喋る事すら出来なかった。
そうして僕は二人によって着替えさせられた。

白いキャミソールに、腰から膝の半分ぐらいの短い間に、白い生地
に黒いラインを入れたミニスカートを履いている。

「可愛いよ。茜」

「可愛いすぎでありんす」

そんな僕を見て二人は、僕に向かってそんな風な言葉を掛けられる。

「恥ずかしいよ」

僕は体を熱くしながら、気持ちを含めながらそう言った。

本当に恥ずかしい。しかも、何で、何で二人に着替えさせられなき
や、いけないの。

僕がそう思っていると、二人が服を脱ぎ始めた。

「ちよっ！脱ぐなら言ってよ」

僕は一瞬、驚いきの声を上げると、直ぐにそう言いながら扉の取っ
手に手を掛けて、扉を開け様とする。それと同時に背中をなぞられ
る様な感覚が走る。

「ひゃいー」

背中をなぞられると、背中に不思議な何かに刺激されて、そんな声を出した。

「可愛い過ぎです」

火織お姉ちゃんは何かに敗北したかの様に、そんな事を言った。

「見てほしりんす」

ローラお姉ちゃんが間違った日本語でそんな事を言うと、僕に見せつけるかの様に服を脱ぎ出す。

「負けられません」

火織お姉ちゃんはローラお姉ちゃんに対抗するかの様に、自分の服に手を掛けて脱ぎ出す。

「張り合わなくていいから」

そうして僕は目の行き場に困りながら、その場を耐えしのいだ。

と言っかもっ、大変だよ。

1116 (前書き)

なかなか原作に入りませんね。

と言うか、これも含めてあと5話で2章に入りますけどね。

そうそう、感想を書いてくれて有難うございます。

では本編に入ります。

お姉ちゃん達に服を着替えさせられ、そして色々大変だった僕は今、食堂に向かって廊下を歩いていた。

廊下はもう見飽きた様な10mぐらいの長いストロークが続いている。そんな長い廊下には肌を少しだけチクチクと刺さる様な寒さがある。そして昨日とは違い、大勢の人がいる。そんな大勢の人の視線が僕に突き刺さる。

多分、この格好のせいだろうな。
と僕は自分の格好を悔いた。

あと、このチクチクとした物は、視線も混じっているな。

そうして10分も歩いていると食堂の前に着いた。

食堂の扉も見慣れて来たのか、木材と言う事が当たり前になった。

お姉ちゃん達はそう言いながら、扉を開けていく。すると扉の留め具は軋む様に音を立てながら、開いていく。

「入りますよ」

「そうでありんすよ茜」

すると二人は食堂に入りながらそう言った。

「待ってよ」

僕はそう言いながら、お姉ちゃん達に向かって走り出した。

そうしてお姉ちゃん達に追いついた時にはもう、カウンターの前に

いた。

僕はゆっくりと首を動かして周りを見た。食堂には昨日の夜と一緒に沢山の人が、食堂にある椅子の3分の2・5ぐらいを埋めている。

「私はお寿司で」

すると火織お姉ちゃんがそうおばちゃんに注文する。

だが、おばちゃんは僕達も火織お姉ちゃんと一緒に食べると判断したのか、まだカウンターにいる。

「私はうどんでありんす」

ローラお姉ちゃんがそう、残念な日本語をつかって注文した。

「お寿司で」

僕はそう続け様に、ローラお姉ちゃんが終わったと同時にそう言った。

するとおばちゃんは分かった様で、カウンターの奥にある、扉な入っていく。

おばちゃんが完全に部屋に入った瞬間に、後ろから誰かが抱きついて来た。

「きゃっ！」

僕は完全に油断していたのか、そんな悲鳴を上げる。

それと同時に後ろで凄い音がする。

「ちよっ！辞めてくれ。神様」

この声はステイルかな？多分、ステイルであろう人物はそんな風に何か言い訳している。

刀てヤバくない。

僕がそう思いながら、全く動かないでいると、火織お姉ちゃんは「イヤです」とステイルの言葉を一刀両断した。

それに追い討ちを掛ける様に、ローラお姉ちゃんが「そうでありんすよ」と言った。

「ギャーーーーー」

僕の後ろではステイルがそう叫び、お姉ちゃん達がステイルを僕から離す様に退治していた。

するとおばちゃんがカウンターの奥から、プレートを器用にも3つも持ちながら出てきた。

と言つか、おばちゃん。どうやって扉開けたの。

「秘密だよ」

「なっ！」

顔に出たのかな？

僕はおばちゃんのそんな発言に惑わされながらも、プレートを受け取って、3人を沈めた。

するとローラお姉ちゃんは渋々とプレートを取り、火織お姉ちゃんは溜め息を吐きながらプレートを握った。

「僕の近くが空いてるから、おいで」

ステイルはそう言う僕から離れた。ステイルの格好は昨日と変わらずに修道服を着ている。

すると自分の席に向かってステイルが歩き出した。

「あっ！そつだ」

僕は歩き出したステイルの腕を握る。すると修道服越しではあるが、ステイルの暖かさが仄かに伝わってくる。

「何だい茜？」

ステイルは不思議そうに聞いて来た。

「おはよステイル」

そう笑顔で僕は挨拶をした。するとステイルや周りの人達の頬が急に真っ赤になっていく。

中には鼻を抑えながら、僕を見ている人すらいる。

「ああ、おはよう茜」

そうして挨拶を済ませると、僕達はステイルの席まで歩いていく。

歩く度に沢山の人が僕の顔を見て、さっきの人達の倍以上の鼻血を出したり、テーブルに顔を打って椅子を動かすから、席に着くのが一苦労だよ。

と言っか、みんな目が怖いよ。

そうして10分も掛かってステイルの席に着いた。

「座ろっか」

「うん」

僕はそう言いながらステイルの横の席に座る。するとお姉ちゃん達が隣の椅子に、同時に手を掛けた。

「神製。放しなさい」

ローラお姉ちゃんは火織お姉ちゃんを睨みながら、声を少し低くしてそう言う。

「イヤです」

火織お姉ちゃんはその一言で、ローラお姉ちゃんの声を一刀両断した。

「私が茜の隣に座るでありんす」

「いえいえ、茜は私の弟、いえ、物なので私が隣に座ります」

二人はそんな風にいがみ合うながら、目から火花を散らしていた。

「僕は火織お姉ちゃんのものじゃないよ」

僕は此处で言わなかったら、認めた事になって、後々やばくなると判断してそう言った。

「そうでありんす。茜は私の『物』でありんす」

ローラお姉ちゃんはやたらに『物』を強調しながらそう言った。

「どっちも違うから!!」

すると痺れを切らしたのか、ステイルがイラつきながら喋り出す。

「ああ、もう茜を横にズラせば大丈夫だろ」

「「それだ」」

そうして僕が一つ横にズレて、その場は落ちついた。

でも、両端がお姉ちゃんだと言うのも地獄だった。

「茜あーんでありんす」

ローラお姉ちゃんが外国人とは思えない程に上手に箸でうどんを掴みながら、僕の口に入れていく。

ローラお姉ちゃんの箸が口の中に入り、僕はゆっくりと口を閉じて、うどんを食べる。

うどんは汁が絡み合っており、口の中に広がっていく。

するとローラお姉ちゃんは箸をゆっくりと抜いていく。すると箸は唇に擦り付けられて、軽く刺激していく。

「茜こつちもですよ」

火織お姉ちゃんもお寿司を掴み、ネタの方に醤油を付けると口の中に入れていく。

僕は火織お姉ちゃんの指ごとお寿司を食べた。

お寿司は新鮮な魚の味と、シャリのふつくらとした食感が広がっていく。

「あつ、あ」

火織お姉ちゃんはそんな事を言いながら、口から指を抜いていく。

「あむ」

その途端、火織お姉ちゃんは僕の口に入れた指を自分の口に入れて舐め始めた。

「茜！」

ローラお姉ちゃんが対抗意識なのか、指を僕の口に入れ様とする。

「茜！」

火織お姉ちゃんはローラお姉ちゃんの指を防いだ。

「茜は渡しません」

「五月蠅いでありんす」

二人はそんな風にいがみ合っていく。

と言っか、もう。助けて。

そうして朝食は1時間以上も掛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8516z/>

とあるGANTZからの転送者

2012年1月6日20時53分発行